

## 国際的センスを備える医療福祉の専門家育成を目指して

安田 聖子\*

## はじめに

国際医療福祉大学では、授業科目『海外保健福祉事情』として一部の学科を除いた学部・学科を対象に夏休みや春休みを利用し約2週間の海外研修を実施している。1999年より、大学の基本理念の1つである「国際的センスを備え、いかなる国の人々も伸び伸びと協働できる真の国際人を養成すること」を具現化するものとして始まった。本学が学術交流協定を結んでいる23の国や地域から研修先を学生が選び、異文化や医療福祉について体験するものである。当初は3~4カ国への派遣であったが、2018年度には23の国・地域に819人を派遣するまでに拡大した。研修先ごとに2~3名の教員が引率を担当する。現地では、医療スタッフの指導のもとで患者さんのケアの補助を行うなど、現地の医療現場に触れられるほか、国際的な視点を養う貴重な機会となっている。今回、今まで引率を経験した国の中で本学科と交流が深い韓国での海外研修および研修受け入れについてご紹介する。

### I. 大邱韓医大学への海外研修について (2017年8月3日~13日、韓国)

本学学生57名(医学検査学科54名、看護学科3名)、教員3名が参加した。研修先である大邱韓医大学は、東洋医学科や看護学科など医療系の学科を中心としており、韓方を用いた韓医学科が有名で

ある。宿泊・食事は大学寮にてご提供いただいた。

#### 1. 実習・講義・研修について

**実習:** 組織学実習では動物臓器の切り出しからパラフィンブロックを作成し、各自で薄切した標本を染色し鏡検を行った。分子診断学実習では採血した血液からPCR法によるDNA増幅の工程、およびピペット操作について学んだ。どちらも2日間かけて丁寧な指導を受けることができた。

**特別講義:** 日常的なシチュエーションで用いる韓国語の講義、韓国医療福祉制度の講義、核酸IGRA検査の分子診断学的研究について講義を受けた。どれも学生に分かりやすい内容であり、韓国と日本との違いを意識させるものであった。講義は堅苦しいものではなく気軽に質問できるような雰囲気づくりをしていただいた。

**病院見学:** 大邱韓医大学校附属大邱韓方病院およびチルゴク慶北大学校病院を見学した。大邱韓方病院は韓方専門病院であり、東洋医学と韓方を併用した治療を行っているのが特徴である。チルゴク慶北大学校病院は100年以上の伝統をもつ国立病院である慶北大学校病院の分院であり、がんと老人疾患に特化した病院として設立された。両病院では院内見学のほか、各職種の責任者から直接仕事内容や機器の説明を受けることができた。

#### 2. 文化交流・観光について

文化交流では韓国学生との交流、韓服での茶道

\* 国際医療福祉大学 福岡保健医療学部 医学検査学科 syasuda@iuhw.ac.jp



写真1 民族衣装での茶道体験

体験および扇子作りを体験した(写真1)。韓国学生が手取り足取り教えながら韓国の伝統料理と一緒に作り、日本学生は準備した折り紙で作成した力士でトントン相撲を韓国学生に体験してもらった。最初は初めての国際交流に戸惑いを見せていた日本学生も、最後は和気藹々とした様子で充実した時間を過ごせたことが窺えた。観光では、韓国学生同伴のもと大邱市内を観光し、別の日には韓国の京都といわれる慶州や釜山を観光した。

## II. 大邱韓医大学臨床病理学科研修 受け入れについて

本学科では毎年1月に大邱韓医大学臨床病理学科の学生約25名の一週間研修を受け入れている。今年度で4回目を迎えた。研修内容は年により多少異なるが、主に大学内での検査実習(遺伝子検査、輸血検査など)、病院見学(本大学グループ病院2施設、シミュレーションセンターなど)、観光(太宰府天満宮など)である。大学内には韓国語通訳可能な大学職員が常勤しており、言語におけるトラブルは今まで一切ない。実習での資料は韓国語もしくは英語に訳したものを使用し、集中して研修に取り組めるよう配慮している。研修中サポートを行うボランティアは、夏季に大邱韓医大学で海外研修に参加した本学科学生が中心となっている。今まで外国人と触れ合う機会がなかった本学学生だが、自身が研修先でお世話になった感謝の気持ちを返すために、韓国学生に満足してもらおうという気持ちに溢れていた。拙い



写真2 研修受け入れでの講義の様子

英語や韓国語で一生懸命サポートする様子は、人に尽くすことが生業である医療人の本質を養う良い経験となっていることが窺える(写真2)。

## III. ま と め

海外研修の引率で毎年感じることは、全員が無事に怪我もなく帰国した時の安心感と開放感が甚だしいことである。教員のそのような気苦労を知ってか知らずか、初めての海外に怯えていた学生達が研修を通して表情豊かで積極的に意見を述べる様子を見せるようになり、研修を心から楽しんでいることがわかる。海外研修は学生や教員への負担が大きいのではないかと引率する前は思っていたが、実際は病院内見学や講義、学生間交流など個人では体験できない貴重な時間を得ることができ、何ものにも変えがたい刺激的な経験となると強く感じている。帰国後、日本の医療制度や臨床検査についてより深く知りたいと述べた学生が多くいたことから、学生も同様に感じているようである。学生にとって海外研修が日本だけではなく世界のことも考えるきっかけとなることを祈っている。

## IV. 最 後 に

学生が不自由なく海外研修に参加できるのは研修受け入れ先の大学・施設の教員やスタッフ、および本大学国際交流担当事務の方々の手厚いサポートのお陰である。この場を借りて感謝申し上げる。